

VRを活用したストーマケア教育の開発と社会実装への取り組み

株式会社 VOICE lab. 野下 隆寛

1. 背景・課題

ストーマ（人工肛門・人工膀胱）を造設した患者（オストメイト）は、退院後、自身または家族等によって装具交換やストーマ周囲の皮膚管理などを継続して行う必要がある。しかし、入院期間の短縮等により、入院中に十分なセルフケアの練習機会を確保することが難しい場合があり、退院後の生活に不安を抱える患者や家族も少なくない。

一方、ストーマケアを必要とする場面は、ストーマを専門とする医療従事者だけが担うものではない。一般病棟や地域医療、在宅・介護の現場などでは、ストーマケアを専門としない看護師や介護職等がオストメイトに関わる機会もある。そのため、専門職以外でもストーマや基本的なケアについて理解し、必要な知識を学べる環境が重要となる。

さらに、ストーマそのものに対する社会的な認知は十分とはいえず、「どのようなものなのか」「どのような生活を送ることができるのか」を知る機会も限られている。

こうした「患者本人のセルフケア」「家族等による支援」「医療・介護従事者の教育」「社会の理解」という複数の課題に対し、新たな学習手段の一つとしてVRの活用を検討した。

2. VRを活用したストーマケア教育の開発

宮崎大学医学部との連携により、VRを活用したストーマケア教育コンテンツの開発に取り組んできた。

本コンテンツでは、患者本人の視点に近いVR映像を用いることで、装具の取り外し、洗浄、ストーマの観察、装具の準備・貼付といった一連のケアを疑似体験できる。医療従事者による説明を一方に視聴するだけでなく、「自分自身がケアを行う視点」で学習できることを特徴としている。

また、オストメイト本人だけでなく、家族、看護師、介護職、看護学生等、それぞれの立場からストーマケアを学ぶことができる教育コンテンツとして開発を進めている。

3. 実証から社会実装へ

開発したVRコンテンツは、宮崎大学における看護学生への教育、日本オストミー協会全国大会、介護福祉士を対象とした研修等で活用し、オストメイトや医療・介護従事者から意見を収集しながら改良を重ねてきた。

また、大学病院・病院での試験導入や国内外の展示会への出展を通じ、医療・介護現場だけでなく、これまでストーマに触れる機会のなかった人がストーマを「知る」ための手段としてもVRを活用し、その可能性を検証している。

現在は、これまでの研究・実証で得られた知見をもとに、ストーマケアVR「amots」として社会実装に向けた取り組みを進めている。さらに海外での活用を想定した英語版・タイ語版の制作など、多言語化にも取り組んでいる。

4. 今後の展望

本取り組みの目的は、VRそのものを普及させることではない。オストメイト本人が安心してセルフケアを学べること、家族や支援者が必要な知識を得られること、ストーマを専門としない医療・介護従事者が学習できること、そして社会がストーマについて知る機会を増やすことが重要である。

今後は、医療機関、介護施設、教育機関等への普及を進めながら、ストーマケアを「一部の専門家だけが知っているもの」から「必要な人が、必要なときに学ぶことができるもの」へと変えていくことを目指す。

さらに、ストーマケア領域で得られた知見をもとに、患者教育や医療・介護従事者教育など、VRの特性を生かすことのできる他領域への展開も検討していく。